# 令和２年度　棚倉町学力向上研究計画

棚倉町学力向上推進委員会
棚倉町教育委員会

## １　研究主題

「夢をつなぎ、よりよく生きようとする子どもの育成」（Ｒ２）

～自己マネジメント力を生かした棚倉型サイクル学習の推進～

## ２　研究の経過及び成果と課題

### （１）経過及び成果

棚倉町においては、平成２０年度に「棚倉町学力向上推進会議」を立ち上げ、町全体の共通テーマで研究を進めてきた。令和元年度までに多くの成果を挙げ、それらを研究集録にまとめてきた。特に、基礎的・汎用的能力のアウトカム評価の在り方を提案し、学力との関係を考察し、学力向上につなげてきたことが大きな成果である。

さらに、各園・学校においては、研究主題に迫るため「キャリア教育で育成する基礎的・汎用的能力」を身に付けさせる指導方法を積極的に授業へ取り入れ全職員による組織的な研究を進めてきた。

本年度は、「キャリア教育の視点に立った『授業スタンダード』の効果的な活用」「子ども主体の授業への改善」「学びの基盤づくり」の実践を通して、「自己マネジメント力を生かした棚倉型サイクル学習の推進」に取り組む。これらの成果を生かしつつ、自分の目標や夢に向かって学び続ける具体的な子どもの姿でキャリア教育と学力向上の成果を明らかにしたいと考えた。

### （２）課題

△　どの学年でも、自己理解・自己管理能力と課題対応能力が、他の能力に比べて肯定的な意識が低い。課題対応能力が高くなれば、情報を整理分析する力や解決の方法を見つける力が高くなり、国語の長文読解や算数・数学の文章題を順序立てて解決する力が身につくと考えられる。課題対応能力の意識は、棚倉町学力向上推進委員会で進めている授業スタンダードを意識した授業展開や ICT の効果的な活用（プログラミング教育を通した資質・能力の向上）によってさらに高くなると考えられる。

△　自己管理・自己理解能力の意識が低いことから、自分の長所や短所を分析できず、効率的な学習ができていない子がいることが考えられる。自分の良さを認めることができるように、棚倉小学校で研究している「ほめポイント」を町で共有し、自信をもって課題に取り組めるような意識を子どもたちに持たせてあげることが必要と考えられる。自己肯定感が高まることで居心地よい学級づくりにつながり、学習への意欲が高まっていくものと考えられる。

### （３）課題解決のために

これらの課題を解決するために以下の考えで取り組んでいきたい。

①　研究主題を、**「夢をつなぎ、よりよく生きようとする子どもを育てる教育の実践」**と設定した。自分を知り、自分のよさや課題を把握し、児童・生徒が、目標を明確にし、夢をもって、その実現のために、自ら学び続ける姿を育てていきたい。これは、自己マネジメント力が身に付いた姿であり、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す学習指導要領の考えと重なるものである。より能動的で学習者が主役の学びを通して、活用力の育成を図りたい。

②　キャリア能力を兼ね備えた学力を身につけさせていきたい。基礎的・汎用的能力が育ってこそ、確かな学力が身につくと考えられる。基礎的・汎用的な能力については、共通理解のもと、学校が設定し、子どもにも意識させ、「ほめポイント」のような形で保護者や地域とも共有できるような方法を学校の実態に応じて工夫する。

③各園・学校では、児童の実態と課題をもとに、今までの研究成果を生かしながら、学校で育てたい資質・能力を明確にして、学力向上グランドデザインを作成し、育てたい資質・能力を伸ばすようにする。

④創意工夫を加えながら幼・小・中共通理解のもと、地域の実態を踏まえ、「令和２年度棚倉町学校教育経営改革プラン」をもとに「令和２年度重点プラン」を作成し、町全体で取り組む。

（４）本年度の重点

≪重点的に共通実践していきたい内容≫

**実践１ キャリア教育の視点に立った「授業スタンダード」の効果的な活用**

◎キャリア能力を意識した、「授業スタンダード」の実践
・指導方法の工夫と育む能力の意識化
・板書計画に基づく授業づくり
・授業の振返りの充実

○可能性を引き出し、生きてはたらく力を高める特別支援教育の充実
・個々の力に応じた指導方法の工夫と能力向上
・個に応じた学びを充実させる環境と教材づくりの充実

。

**実践２ 子ども主体の授業への改善**

◎探究学習による主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり
・「ふるさと棚倉」を意識した総合的な学習の改善
・棚倉の歴史のよさを追究する場の設定

○主体的・対話的で深い学びのための ICT の活用
・思考力、判断力、表現力を高める場面での ICT 活用
・プログラミング学習の実践と論理的思考力の育成

**実践３ 学びの基盤づくり**

◎学力向上の要となる学級づくり
・育みたい資質・能力の明確化
・「ほめポイント」を意識した学級づくりと共有化

○授業周辺の学びの基盤づくり
・発達段階に応じ年間を通した学習計画作りと反省、及び改善
・フォーサイト手帳等の自己マネジメント力向上のためのツールの活用

○キャリア教育意識調査の実施（２回）と分析、及び対応
・キャリア能力の向上と学力の関係を分析を生かした指導

（５）組織・体制

研究を推進し、本町の取組と成果を児童の具体的な姿で共有するために、本委員会の組織・体制を見直していく。

本年度の重点事項を実践し、共有し、発信できるような組織と体制を構築する。

別紙「棚倉町学力向上推進事業　令和２年度重点プラン」にもとづき、実践がしやすいように研究を４つの推進チーム（授業づくり・探究学習づくり・学びの基盤づくり・ＩＣＴ推進）に分け、PDCA マネジメントサイクルで研究を進める。

本委員会の共通テーマ及び研究の趣旨を生かすとともに、**一人一人のキャリア発達を意図した各学校のテーマを設定し、推進していくこととする。特に、４つの研究推進チームにおいては、「自己マネジメント力」が身に付くように、棚倉型サイクル学習を共通に実践していきたい。**また、相互参観は各校の計画で進めるとともに、研究協議会の開催をとおして情報交換を行い、優れた実践の共有化を図りたいと考える。本年度は、研究の成果を子どもの姿でまとめ、読みやすく次年度に使えるような研究集録を目指したい。

なお、「棚倉型サイクル学習」とは、県教育委員会「家庭学習スタンダード」に示されている「ＲＰＤＣＡサイクル」より以前から本町で取り組んでいるもので、「Ｖ（ビジョン→めあてをたてる）」を重視して、「ＲＶＰＤＣＡサイクル」としている。めあてをたてる段階を重視することで、自分で決めるということを重視し、児童がより「振り返り」がしやすくなり、自己の成長が実感しやすく、新しい目標が設定できるように配慮した。（※Ｒはリサーチ「自分を知る」）

## ３　研究推進の基本的な考え

**※　棚倉町学校教育経営改革プランをもとに、「学力向上推進事業」「地域連携推進事業」の「令和２年度重点プラン」に沿って、キャリア教育推進を意識した実践研究を進めること**

（１）町としての共通の研究テーマのもと、各校園が研究主題・視点を設定して研究を進める。
（２）町校園長会議の指導のもと、推進委員会、チーム会議を定期的に開催し、研究を進める。
（３）児童生徒の学力やキャリア能力の実態を調査して分析し、成果と課題を明らかにし、分析結果を指導に生かしながら研究を進める。
（４）授業研究会を開催して各校の研究を検証するとともに、どのように指導したかを含めて育成した子どもの姿（子どもの表現、学習成果、自己評価や教師評価等表）を明確にして、資質・能力の指導と評価の在り方を明らかにする。

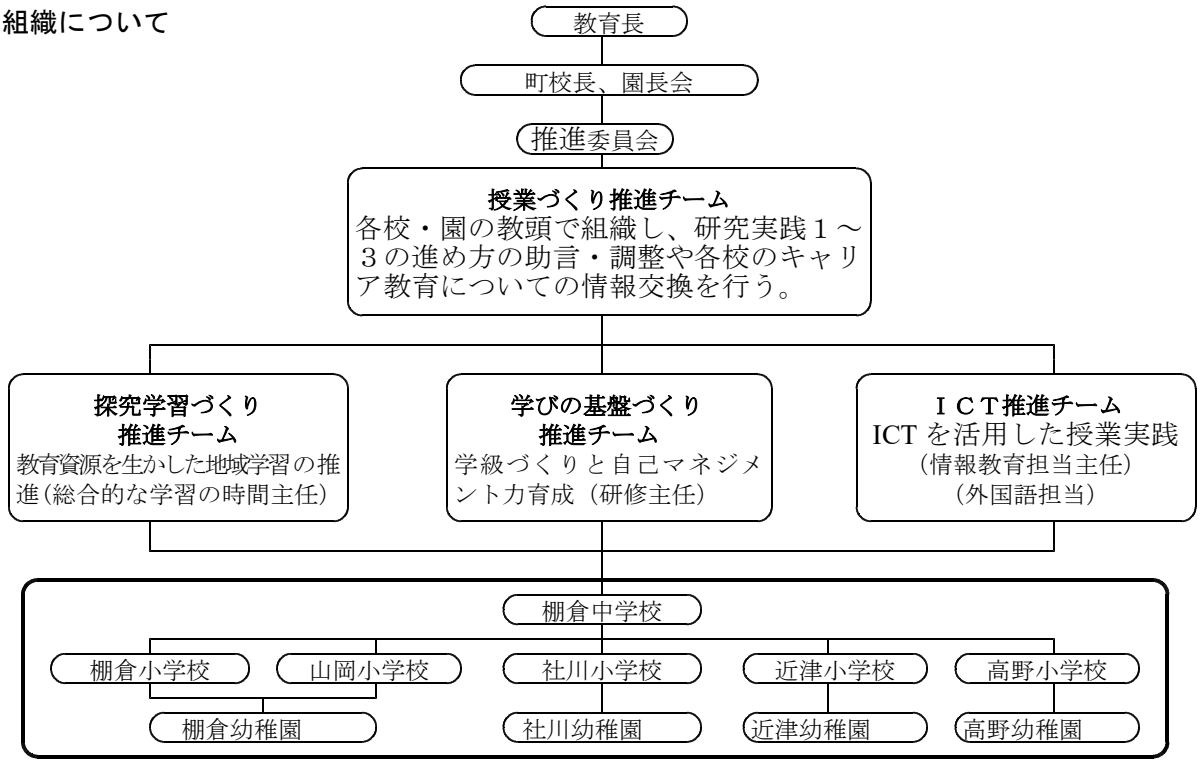
## ４　研究の内容

（１）**キャリア教育を視点にした「令和２年度重点プラン」に基づく**各校の実践と研究
（２）幼・小・中の各校が連携し、**キャリア能力を系統的に高める指導法の在り方**の研究
（３）育みたい資質・能力を明確にして、共有化する「学級づくり」や「保育環境の在り方」の研究
（４）**RVPDCA 棚倉型サイクル学習（自己マネージメント）の定着のための研究**
（５）地域の教育資源を活用し、地域全体で子供たちの学びを支援する活動の在り方の研究
（６）**ＩＣＴを活用した児童・生徒主体の授業づくりのあり方について**の研究
（７）幼・小・中学校の、**ALT 等と連携した効果的な指導**の在り方についての研究

## ５　研究の方法

（１）**キャリア能力（基礎的・汎用的能力）を活かす授業づくり**と子どもの意欲を引き出す**保育実践**を参観し合い、協議を行い、検証する。**その際には、ＩＣＴを効果的に活用する。**
（２）各園・学校において次のような内容について情報を交換し合い、成果について共有し合うとともに課題を解決するための工夫改善について協議する。
①キャリア４能力の視点から、児童・生徒の学びの姿をもとに検証
②自己マネジメント力を高め、主体的な学習を促す授業改善について
③学習習慣の育成に向けた学習計画表などの活用について
（３）CRT とキャリア教育意識調査（６月と１１月）による検証と分析を生かした指導

## ６　組織について




| | |
|---|---|
| 棚倉町学力向上推進委員会 | 各校園教頭、各校研修主任、 各校総合主任、<br>各校情報教育担当 |
| 同　各推進チーム会議 | 授業づくり推進チーム、探究学習づくり推進チーム、<br>学びの基盤づくり推進チーム、ＩＣＴ推進チーム |

（１）棚倉町学力向上推進委員会（町校長、園長会）（全体の企画）

| No. | 氏　　名 | 職　　名 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 松　本　市　郎 | 教育長 | 顧問 |
| 2 | 渡　辺　　守 | 子ども教育課長 | |
| 3 | 荒　川　文　雄 | 子ども教育課指導主事 | |
| 3 | 藁　谷　　忠 | 子ども教育課ＩＣＴ支援員 | |
| 4 | 松　下　久　之 | 子ども教育課学校教育係長 | |
| 5 | 鈴　木　雅　人 | 棚倉小学校長 | 推進委員会会長 |
| 6 | 坪　井　浩　一 | 社川小学校長 | |
| 7 | 山　口　洋　志 | 高野小学校長 | |
| 8 | 永　山　美　雄 | 近津小学校長 | |
| 9 | 嘉　成　　靖 | 山岡小学校長 | |
| 10 | 深　谷　昇　司 | 棚倉中学校長 | |

（２）棚倉町学力向上推進委員会委員（研究推進の企画・運営）

| No. | 氏　　名 | 職名 | 所　属　校 | 備　　考 | 所属名◎ｷｬｯﾌﾟ |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 中　野　久美子 | 教頭 | 棚　倉　小 | | 授業づくり(◎基盤) |
| 2 | 小　松　光　恵 | 教諭 | | 研修主任 | 学びの基盤 |
| 3 | 本　多　政　史 | 教諭 | | 総合主任 | 探究学習 |
| 4 | 須　釜　祐　樹 | 教諭 | | 情報教育担当 | ＩＣＴ推進 |
| 5 | 戸井田　　瞳 | 教諭 | | 英語専科 | ＩＣＴ推進 |
| 6 | 鶴　水　裕　美 | 教頭 | 社　川　小 | | 授業づくり(◯探究) |
| 7 | 古　山　智　子 | 教諭 | | 研修主任 | 学びの基盤 |
| 8 | 小　川　真紀子 | 教諭 | | 総合主任 | 探究学習 |
| 9 | 薄　　玲　那 | 教諭 | | 情報教育担当 | ＩＣＴ推進 |
| 10 | 高　田　　顕 | 教頭 | 高　野　小 | | 授業づくり(◯基盤) |
| 11 | 小　針　由美子 | 教諭 | | 研修主任 | 学びの基盤 |
| 12 | 鈴　木　ゆかり | 教諭 | | 総合主任 | 探究学習 |
| 13 | 添　田　　総 | 教諭 | | 情報教育担当 | ＩＣＴ推進 |
| 14 | 岡　村　　武 | 教頭 | 近　津　小 | | 授業づくり(◎探究) |
| 15 | 齋　藤　美佳子 | 教諭 | | 研修主任 | 学びの基盤 |
| 16 | 生　方　ルミ子 | 教諭 | | 総合主任 | 探究学習 |
| 17 | 丹　治　康　幸 | 教諭 | | 情報教育担当 | ＩＣＴ推進 |
| 18 | 八　巻　達　仁 | 教頭 | 山　岡　小 | | 授業づくり(◯ＩＣＴ) |
| 19 | 長　谷　川　愛　美 | 教諭 | | 研修主任 | 学びの基盤 |
| 20 | 鶴　水　達　也 | 教頭 | 棚　倉　中 | | 授業づくり(◎ＩＣＴ) |
| 21 | 佐　藤　かおり | 教諭 | | 研修主任 | 学びの基盤 |
| 22 | 本　郷　　峻 | 教諭 | | 総合主任 | 探究学習 |
| 23 | 山　口　卓　也 | 教諭 | | | ＩＣＴ英語 |
| 24 | 神　永　友　輔 | 教諭 | | 情報教育担当 | ＩＣＴ推進 |
| 25 | 金　澤　禎　子 | 教頭 | 棚　倉　幼 | | 授業づくり |
| 26 | 緑　川　玲　子 | 教頭 | 社　川　幼 | | 授業づくり |
| 27 | 石　川　ユミ子 | 園長 | 近　津　幼 | | 授業づくり(◎幼稚園部会) |
| 28 | 藤　田　智　子 | 園長 | 高　野　幼 | | 授業づくり(◯幼稚園部会) |
| 29 | 荒　川　文　雄 | 指導主事 | 子ども教育課 | | 授業づくり |
| 30 | 藁　谷　　忠 | ICT | 子ども教育課 | | ＩＣＴ推進 |
| 31 | シャノン・イエクリー | ALT | 棚　倉　中 | 語学指導 | ＩＣＴ英語 |
| 32 | マーク・マコーム | ALT | 棚　倉　中 | 語学指導助手 | ＩＣＴ英語 |

（３）各チーム研究内容及び研究員（７月まで）

| | | |
|---|---|---|
| 授業づくり推進チーム<br>(小学校部会)<br>(幼稚園部会) | ○各校・園の教頭で組織し、研究実践１～３の進め方の助言・調整や各校のキャリア教育についての情報交換を行う。<br>○小中学校では、研究内容について共通理解を図り、２月の実践発表に向けて、「学びの基盤」「探究学習」「ＩＣＴ」それぞれの部会における自校の研究成果を累積していくことを確認した。<br>○　幼稚園部会では、基礎的・汎用的能力と育てたい１０の姿とのすりあわせをしながら、自園の実態に応じて、遊びを通して資質・能力を育んでいくことを確認した。 | ○各校教頭<br>棚倉小<br>社川小<br>高野小<br>近津小<br>山岡小<br>棚倉中<br><br>〈幼稚園部会〉<br>◎近津幼園長<br>○高野幼園長<br>○棚倉幼教頭<br>○社川幼教頭 |

| | | |
|---|---|---|
| 探究学習づくり推進チーム | ○各校の「総合的な学習の時間」主任で組織し、地域の教育資源を生かした追究学習により、棚倉町について学び、自己の生き方を考える指導の在り方を明らかにする。<br>○　コロナによる臨時休校とチャレキッズの中止によって、計画が大幅に変更されたが、それぞれの学校の実態を生かして、できる範囲で探究学習を実施していることが確認された。<br>○　棚倉町の「歴史的風致維持向上計画」と関連させながら、地域学習を進めていく方向性を確認し、そのための研修等を企画している。 | ◎チームリーダー<br>近津小教頭<br>○サブリーダー<br>社川小教頭<br><br>○各校総合主任<br>棚倉小<br>社川小<br>高野小<br>近津小<br>山岡小<br>棚倉中 |

| | | |
|---|---|---|
| 学びの基盤づくり推進チーム | ○各校の研修主任で組織し、「ほめポイント」を意識した学級づくりを進め、自己マネジメント力を向上させる指導の在り方を明らかにする。<br>○　３密を避ける「新しい生活様式」の中で、各校とも学級づくりを進めている。<br>○「ほめポイント」については、資質・能力を育む観点からその子を伸ばしていこうとする試みが見られた。<br>○　学習計画表の作成については、各校とも、日常化を図るように努めている。<br>○　今後は、ＱＵテストやキャリア意識調査の結果を分析しながら、個に応じて対応していくことを確認した。 | ◎チームリーダー<br>棚倉小教頭<br>○サブリーダー<br>高野小教頭<br><br>○研修主任<br>棚倉小<br>社川小<br>高野小<br>近津小<br>山岡小<br>棚倉中 |

| | | |
|---|---|---|
| ＩＣＴ推進チーム | ○子ども主体の授業づくりのためのＩＣＴ活用を推進するとともに、町の英語教育について研究推進する。<br>○各チーム部会時に各学校でのＩＣＴ活用状況について情報交換し、成果や課題を共有し、日々の実践に生かしている。第２回部会以降は、指導案を含めてグーグルドライブ上でいつでも情報を共有できるようにしている。<br>○ＩＣＴ・プログラミング教育サポートの渡邉景子先生に、事前打ち合わせ１４回、授業支援１１コマご支援いただきながら、プログラミング授業、ＩＣＴ活用、情報モラル教育などを進めている。<br>○　今後は、「Ｇ Ｓｕｉｔｅ」を活用して、児童生徒への指導、校務処理、諸会議などを行っていくようにしたいので、研修と活用に努めていくことを確認した。 | ◎チームリーダー<br>棚倉中教頭<br>○サブリーダー<br>山岡小教頭<br><br>○情報教育担当<br>棚倉小<br>社川小<br>高野小<br>近津小<br>山岡小<br>棚倉中<br>○英語専科教員<br>○ ALT ２名 |

各チームの課題（１０月から）

| | | |
|---|---|---|
| 授業づくり推進チーム<br>（小学校部会）<br>（幼稚園部会） | ○各校・園の教頭で組織し、研究実践１～３の進め方の助言・調整や各校のキャリア教育についての情報交換を行う。 | ○各校教頭<br>棚倉小<br>社川小<br>高野小<br>近津小<br>山岡小<br>棚倉中<br><br>〈幼稚園部会〉<br>◎近津幼園長<br>○高野幼園長<br>○棚倉幼教頭<br>○社川幼教頭 |
| | ○１２月のシンポジウム、２月の実践発表に向けて、授業実践を通して基礎的・汎用的能力が身に付いた子どもの姿を具現し、発表できるよう記録に残し、累積していく。<br>○　幼稚園部会では、自園の実態に即して、砂遊び等（ＩＣＴ、英語遊びなど）を通して資質・能力を育む。<br>○　アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの作成を検討する。（幼・小）<br>○　キャリアパスポートの記載内容について、中学校での活用を前提として、小学校で共通理解を図る。<br>○　資質・能力をもとに、幼小中の連携を推進する。 | |

| | | |
|---|---|---|
| 探究学習づくり推進チーム | ○各校の「総合的な学習の時間」主任で組織し、地域の教育資源を生かした追究学習により、棚倉町について学び、自己の生き方を考える指導の在り方を明らかにする。 | ◎チームリーダー<br>近津小教頭<br>○サブリーダー<br>社川小教頭<br><br>○各校総合主任<br>棚倉小<br>社川小<br>高野小<br>近津小<br>山岡小<br>棚倉中 |
| | ○　チャレキッズと中学校の職場体験学習をつなぐ指導ののあり方を検討する。特に職場体験を、探究学習として位置づけられないか。<br>○　棚倉町の「歴史的風致維持向上計画」と関連させた学習を構想・実践し、子どもの姿で報告する。<br>○　地域学習を行う意義について、強く意識させる指導のあり方を検討する。「今、○○のような状況なので、□□に取り組んでいます。」 | |

| | | |
|---|---|---|
| 学びの基盤づくり推進チーム | ○各校の研修主任で組織し、「ほめポイント」を意識した学級づくりを進め、自己マネジメント力を向上させる指導の在り方を明らかにする。 | ◎チームリーダー<br>棚倉小教頭<br>○サブリーダー<br>高野小教頭<br><br>○研修主任<br>棚倉小<br>社川小<br>高野小<br>近津小<br>山岡小<br>棚倉中 |
| | ○「ほめポイント」について、評価のあり方を工夫し、資質・能力を伸ばしていこうとする試みを実践する。<br>○　学習計画表の作成については、学年の発達段階に応じて工夫し、いつ休校になっても自分で計画を立てて進める力と指導の在り方（ＩＣＴも含めて）を工夫する。その成果は子どもの姿で記録し、累積する。<br>○　効果的なキャリアパスポートの使い方について実践を通して明らかにする。 | |

| | | |
|---|---|---|
| ＩＣＴ推進チーム | ○子ども主体の授業づくりのためのＩＣＴ活用を推進するとともに、町の英語教育について研究推進する。 | ◎チームリーダー<br>棚倉中教頭<br>○サブリーダー<br>山岡小教頭<br><br>○情報教育担当<br>棚倉小<br>社川小<br>高野小<br>近津小<br>山岡小<br>棚倉中<br>○英語専科教員<br>○ ALT ２名 |
| | ○　「Ｇ Ｓｕｉｔｅ」を活用して、仮想空間での教育活動が推進できるように、研修と活用に努める。<br>○　休校を想定して、オンラインでの教育活動が可能なように、児童の家庭におけるＩＣＴ環境（Ｗｉ－Ｆｉ、端末の有無など）を把握する。<br>○　タブレット等を使用した経験をなるべく多く積ませる。また、「プログラミング教育の手引（第三版）」などを活用して、計画的に実施する。<br>○　一人１台タブレットを使用するようになるので、使い方のレベルから社会生活でも必要なレベルの情報モラルを指導する。 | |

## ７　事業推進計画

| 月／日 | 曜 | 事　業　等　名 | 内　　容 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| ４／　３ | 金 | ◆推進委員会校長会 | 組織・事業概要の検討 | 町校長・園長会 |
| ５／　１ | 金 | ◆推進委員会校長会 | 組織・事業の検討 | 町校長・園長会 |
| ５／２０ | 月 | ○第１回授業づくり推進チーム会議 | 研究推進についての確認 | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| ５／２９ | 金 | ◆推進委員会校長会 | 研究のまとめについて | 町校長・園長会 |
| ６／　２ | 火 | 第１回学びの基盤づくり推進チーム会議 | ・研究内容の共通理解<br>・チームの研究推進計画 | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| ６／　３ | 水 | 第１回探究学習づくり推進チーム会議 | ・研究内容の共通理解<br>・チームの研究推進計画 | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| ６／　８ | 月 | 第１回ＩＣＴ推進チーム会議 | ・研究内容の共通理解<br>・チームの研究推進計画 | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| ６月中旬<br>～下旬 | | □キャリア教育意識調査（第１回） | | |
| ６／２９ | 金 | ◆推進委員会校長会 | 研究の経過について | 町校長・園長会 |
| ７／１０ | 金 | 第２回ＩＣＴ推進チーム会議 | ・各校の実践<br>・渡邉景子先生の指導 | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| ７／１５ | 水 | 第２回探究学習づくり推進チーム会議 | ・各学校の実施状況<br>・歴史的風致 | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| ７／１６ | 木 | 第２回学びの基盤づくり推進チーム会議 | ・学級づくり<br>・学習計画 | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| ～７月末 | | □ＱＵテスト | | |
| ７／３０ | 金 | ◆推進委員会校長会 | 研究の経過、キャリア教育意識調査の結果と分析について | 町校長・園長会 |
| ９／１１ | 金 | 近津小授業研究会 | ３年国語科 | |
| ９／１４ | 月 | 社川小授業研究会 | ４年道徳科 | |
| ９／２５ | 金 | 高野小授業研究会 | １年国語科 | |
| １０／１ | 木 | ◆推進委員会校長会 | 後期の研究推進について | 町校長・園長会 |
| １０／１２ | 月 | 幼稚園教育研修会 | 社川幼稚園実践発表、講演 | |
| １１／１０ | 火 | 山岡小授業研究会 | ５・６年算数科 | |
| １０／２８ | 木 | ◆推進委員会校長会 | キャリア教育シンポジウムについて | 町校長・園長会 |

| 月／日 | 曜 | 事　業　等　名 | 内　　容 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| １１／１１ | 水 | 棚倉中授業研究会 | １年国語科、理科、数学科、社会科、美術科、英語科<br>キラリ学力向上と兼ねる | |
| １１／１８ | 水 | 第２回授業づくり推進チーム会議 | 研究の中間まとめについて<br>キャリア教育シンポジウムの実践発表について | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| １１月<br>20日~30日 | | キャリア教育意識調査（第２回） | | |
| １２／１ | 火 | 第３回学びの基盤づくり推進チーム会議 | | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| １２／２ | 水 | 第３回探究学習づくり推進チーム会議 | | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| １２／８ | 火 | 第３回ＩＣＴ推進チーム会議 | | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| ～１２月末 | | □ＱＵテスト | | |
| １２／１８ | 金 | 棚倉小公開 | ４年学級活動、４年外国語活動、６年算数科<br>藤田晃之先生講演<br>キラリ学力向上と兼ねる | |
| １２／２５ | | キャリア教育<br>シンポジウム | 長田徹先生講演、実践発表（社川小、高野小、近津小、棚倉中） | |
| １月上旬 | | CRT 実施 | 小学校全学年、中学校１・２年 | |
| ２／２ | 火 | 推進委員会町校長会 | キャリア教育意識調査の結果と分析<br>キャリア教育シンポジウムの成果と課題について | 町校長・園長会 |
| ２／４ | 木 | 第３回授業づくり推進チーム会議 | 研究のまとめについて<br>教頭会での実践発表について<br>研究紀要について | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| ２／２５ | 木 | 町教頭会 | 各校教頭先生による実践発表 | |
| ３／１ | 月 | 推進委員会校長会 | 今年度の実践成果について<br>次年度の方向性について | 町校長・園長会 |
| ３／２ | 火 | 第４回ＩＣＴ推進チーム会議 | ＩＣＴ活用推進の現状と課題、令和３年度ＩＣＴ活用計画について | オンラインで実施<br>15:30 ～ |
| ３月中旬 | | 研究集録発行 | | |

## ８　具体的な実践内容

### （１）授業づくり推進チーム

◎　自己マネジメント力を生かした棚倉型サイクル学習の推進

〇　地域全体で未来を担う子供たちの「学び」を支援する活動の推進

（小学校部会）総合的な学習の時間、学級づくりと自己マネジメント力、ＩＣＴの総合的な推進

（幼稚園部会）各園の計画に基づく研究実践と小学校との連携、及び情報交換

◎　園児、児童、生徒の姿で成果を公開し、発信する。

〇キャリア教育意識調査の実施（２回）と分析、及び対応

・キャリア能力の向上と学力の関係を分析し、指導に生かす

### （２）学びの基盤づくり推進チーム

◎学力向上の要となる学級づくり

・育みたい資質・能力の明確化

育みたい基礎的・汎用的能力（＝生きる力＝資質・能力の三つの柱）を具体化にする。

具体化したものを「ほめポイント」の形で、児童・保護者（・地域）と共有する。

・「ほめポイント」を意識した学級づくりと共有化

「学級活動」を要として推進する。

キャリア意識調査やＱＵテストを分析して指導に生かす。

〇授業周辺の学びの基盤づくり

・発達段階に応じ年間を通した学習計画作りと反省、及び改善

・フォーサイト手帳等の自己マネジメント力向上のためのツールの活用

発達段階に応じて、自分で決め（＝目標を設定し）て学ぶ力を育成する。（低学年はその素地）

学校全体で自己マネジメントを伸ばす取組を推進する。（小学校は、中学校に接続させる）

### （３）探究学習づくり推進チーム

◎探究学習による主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり

・「ふるさと棚倉」を意識した総合的な学習の改善

「地域の産業を知る、体験する」「地域との触れあい活動から学ぶ」「キャリア教育推進事業から学ぶ」学習事例と子どもの変容

・棚倉の歴史のよさを追究する場の設定

「地域の歴史を知る、学ぶ」学習事例と子どもの変容

### （４）ＩＣＴ推進チーム

〇主体的・対話的で深い学びのツールとしての ICT の活用

・思考力、判断力、表現力を高める場面での ICT 活用

・プログラミング学習の実践と論理的思考力の育成

・家庭学習等で ICT を活用できる能力の育成

### （５）共通

◎キャリア能力を意識した、「授業スタンダード」の実践

・指導方法の工夫と育む能力の意識化、板書計画に基づく授業づくり、授業の振り返りの充実

・自己マネジメント力を育てるための「授業スタンダード」活用

〇可能性を引き出し、生きてはたらく力を高める特別支援教育の充実

・個々の力に応じ自分で目標設定する指導方法の工夫と能力向上

・個に応じた学びを充実させる環境と教材づくりの充実

「３桁の計算が暗算でできるようにする」実践

それぞれの実践を通し、資質・能力を伸ばした子どもの姿を累積して、その成果を検証する。
（〇〇〇な子どもたちに、□□□な活動を△△△のように実施したら、☆☆☆のようになった。）

# 令和２年度棚倉町立各小・中学校の授業研究会について

## １　日程（午後からの実施とする）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 受　　付<br>（来賓のみ） | 授　　業　　参　　観 | 移　動<br>休　憩 | ワークショップ型<br>研　究　協　議 |

## ２　研究会の運営について

（原則として、授業研究会の運営は、会場校の計画により実施する）
※各推進チームの事業は、チームが中心になり運営する。）

（１）運営責任者　　会場校教頭
（２）受付　　会場校
（３）全体会の司会・記録　　会場校
（４）講師・指導助言者の依頼　　※年度当初に事務局で計画するが、各校単独で依頼する場合は会場校長が直接依頼する。
※各推進チームの事業については、チームリーダーが依頼する。

（５）研究協議会の持ち方については、以下の流れを基本とする。

※進行　　会場校
①　開会の言葉　　会場校教頭
②　教育長（推進リーダー）挨拶
③　会場校長挨拶・指導助言者紹介　　会場校長
④　ワークショップ型協議　　ファシリテーターは、会場校で決める
⑤　助言　　授業アドバイザー（指導助言者）
⑥　お礼の言葉　　会場校長
⑦　閉会の言葉　　会場校教頭

（６）その他　その他必要な事項については、会場校に依頼する。
※挨拶等は、できるだけ簡略化し、協議の時間を多く確保するように努める。

## ３　授業研究会開催案内、要項・指導案について

（１）授業研究会開催案内、要項・指導案については、会場校の責任において作成し、各学校及び教育委員会に送付する。指導案の形式は固定しないが、指導過程がわかる簡略版でよいものとする。

（２）当日の要項・指導案は、必要部数を開催日の４日前までに教育委員会事務局、各学校、授業アドバイザー（指導助言者）に届くようにし、参会者は問題意識を持って参加できるようにする。

（３）要項は簡素化し、原則としてメール送信とする。

## ４　研究協議についての留意事項

（１）**該当授業公開学年と同学年の担当者が必ず参加するものとする。**

（２）研究協議は、ワークショップにおいて、基礎的・汎用的能力の４能力を視点にして、子どもたちの学びの姿や感想などの表現されたものについて成果や課題を協議する。
（３）積極的に話し合いに参加し、自己研鑽に努める。

（４）**研究会の実施に当たっては、ＩＣＴを活用して効果的に行うようにする。**

## ５　各校実行委員

（１）各校における町学力向上推進委員会の取り組みの周知、共通理解の徹底

（２）授業研究会のまとめ（各学校で）
**下記の内容について、研究の成果を子どもの姿でまとめ、読みやすく次年度に使えるような研究集録を目指したい。**
①　成果の確認（教材分析、指導過程、教師の意識、指導法〔TT、習熟度別、個別指導等〕指導技術の改善、子どもの学習意欲、家庭学習、読書、ドリル等）
②　子どもたちの学びの姿で成果や課題を発信（具体的な場面と教師の関わり）
③　課題の確認

# 棚倉町学力向上推進委員会についての申し合わせ事項

## １　授業公開の持ち方について

棚倉小学校、棚倉中学校の研究公開と町学力向上推進委員会の各校授業研究会の目的は同じである。どちらも、「地域全体で未来を担う子供たちの『学び』を支援する活動の推進」「自己マネジメント力を生かした棚倉型サイクル学習の推進」（基礎的・汎用的能力を意識した授業づくり）をねらいとする。

## ２　研究授業への職員の参加について

①　町内幼稚園・小・中学校教職員全員の参加する研究授業公開（教育課程上午前限の届）

**※　棚倉小学校･棚倉中学校の研究公開は相互に隔年公開とし、研究公開を行わない年の授業公開は他校に準じて行い自主公開とする。**

②　①の学校以外の研究授業公開は、１つの学年の授業とし、原則として当該学年の担任を参集して、授業を参観し、事後研究会まで参加する。

③　授業公開の学年分担は下記のようにする。

（※令和６年度は、令和元年度に戻る）

<table>
<tr><th>年　度</th><th>令和元年度</th><th>令和２年度</th><th>令和３年度</th><th>令和４年度</th><th>令和５年度</th></tr>
<tr><td></td><td>棚倉小<br>（研究指定公開）</td><td>棚倉小<br>（公開）</td><td>棚倉小</td><td>棚倉小<br>（公開）</td><td>棚倉小</td></tr>
<tr><td></td><td>棚倉中<br>（公開）</td><td>棚倉中</td><td>棚倉中<br>（公開）</td><td>棚倉中</td><td>棚倉中<br>（公開）</td></tr>
<tr><td>１学年</td><td rowspan="2">山岡小</td><td rowspan="2">高野小</td><td rowspan="2">近津小</td><td>社川小</td><td rowspan="2">高野小</td></tr>
<tr><td>２学年</td><td>近津小</td></tr>
<tr><td>３学年</td><td>高野小</td><td>近津小</td><td rowspan="2">山岡小</td><td rowspan="2">高野小</td><td rowspan="2">近津小</td></tr>
<tr><td>４学年</td><td>近津小</td><td>社川小</td></tr>
<tr><td>５学年</td><td rowspan="2">社川小</td><td rowspan="2">山岡小</td><td>高野小</td><td rowspan="2">山岡小</td><td>社川小</td></tr>
<tr><td>６学年</td><td>社川小</td><td>山岡小</td></tr>
</table>

**④　授業公開や研究協議、各推進チームの打合せに当たっては、ＩＣＴを最大限に活用し、効果をあげるようにする。**

## ３　幼稚園教職員の参加

幼小連携の視点から、原則として、１学年の授業を参観し、事後研究会まで参加する。
（小１プロブレム解消の視点）

## ４　中学校教職員の参加

小中連携の視点から、小学校中高学年の授業を参観し、事後研究会まで参加する。
（中１ギャップ解消、小中の連接の視点）

## ５　高等学校への呼びかけ

中学校の研究公開には、町内の高校にも案内状を出す。

## ６　研究推進について

研究内容、日時等については、推進委員会（推進リーダー）の指導のもとに決めていく。

# 「研究集録」作成についての申し合わせ事項

研究の成果は、どんな子供に、どのような活動においてどう指導し、子供がどう変容したかを、子どもの姿と数値を効果的に用いてまとめ、読みやすく、次年度の実践に使えるような研究集録を作成することを目指したい。

※　「子どもの姿」とは、授業や活動等における子どもの言動、振り返りや感想など子どもの表現、通知表の教師所見など、「夢に向かって学び続ける姿勢」「今の学びが自分の将来につながっていると実感する姿」が表現されているものである。

※　「数値」とは、目標を達成した子どもの数、学力偏差値や正答率、アンケート結果等、数値で表される全体及び個人のデータである。

## １　キャリア意識調査、ＱＵテスト等の結果を分析する　【Ｒ／Ｖ／Ｐ】

○　６月下旬に実施した結果を分析して、育てたい資質・能力と個に対するアプローチを明確にする。「どんな子供に、どのような活動においてどう指導するか」を構想する。

○　キャリア意識調査については、集団としての肯定的な評価の割合だけでなく、「そう思う」の割合や、個に着目した前年度との比較などをもとに、個々の課題や「ほめポイント」を明らかにすることに努めたい。

○　ＱＵテストについては、満足群の割合だけでなく、満足していない原因や「意欲」や「ソーシャルスキル」の結果なども分析する。

○　上記の調査以外にも、全国学力調査、各種アンケート等が、対象とすることが考えられる。

## ２　自校の計画をもとに実践する　【Ｐ／Ｄ】

○　育てたい資質・能力と個に対するアプローチを明確にして実践する。

○　新型コロナウイルスの影響の中で、子供たちの学びを保障するために、「棚倉町学校教育経営プラン」「棚倉町地域連携推進事業令和２年度重点プラン」「棚倉町学力向上推進事業令和２年度重点プラン」に基づきキャリア教育を推進し、自己マネジメント力を育成し、学びの基盤づくりを充実させるとともに、限られた時間と条件の中で地域の教育資源を活用した追究学習を展開し、ＩＣＴを活用した授業づくりを進めていく。

○　各チームごとにオンラインで会議を開催し、各校の情報交換を行い、自校の実践を充実させるとともに、日常の実践を通して子どもがどのように変容したかを、子どもの姿と数値で記録し、累積していく。

## ３　実践を評価・改善し、まとめる　【Ｄ／Ｃ／Ａ／Ｒ】

○　実践の評価は、それ以降の指導に生かしていく。また、年間の評価をもとに次年度の教育課程の編成に生かすとともに、その成果をまとめ発表する。

○　発表は、授業づくり推進チームで行い、令和元年度同様、棚倉町のポータルサイトに掲載するとともに、それらを編集して教育委員会が研究紀要を作成する。

○　各校の研究主任、総合的な学習の時間主任、情報教育主任など推進委員会各チームのメンバーは、それぞれの立場から自校の実践をまとめ、授業づくり部会のメンバーである教頭先生が発表するための成果を提供する。

○　本年度の研究紀要は、研究の成果を子どもの姿でまとめ、読みやすく次年度に有効に活用できるような内容と形式を目指したい。

【記述例】

Ａさんは、○○○○○で、６月の意識調査や７月のＱＵテストでは△△△△△であった。そこで、総合的な学習の時間の学習において□□□□□のように働きかけていったら、☆☆☆☆☆のように変容していった。その結果、１２月の意識調査では、▽▽▽▽▽のようになり、◎◎◎◎◎にような新たな目標に向かって努力を続けている。